

【ルルー】

一色歩（22） ……ホテルの従業員

ルルー（20） ……アイドル、音大生

中学歩（13） ……中学生時代の歩

芦原保（57） ……ホテル経営者。オーナー。

芦原洋子（45） ……保の妻

島永翠（15）（24） ……ホテルのフロント

係

木原葵（22） ……歩の元恋人

荒藤巴春（27） ……ホテルのボーイ

一色浩一郎（58） ……歩の父親

一色圭子（55） …… 歩の母親

飯田（39） …… バー店長

ミキ（21） …… アイドルグループ『エンジ

ェリカ』エンジェリカ』のリーダー

森田（26） …… 葵の恋人

お祭り女子（14） …… 中学生、歩の同級生

ラガーシャツ（17） …… 男子高校生

クレア・フィールド（32） …… 音楽プロデ

ューサ

外国人客 1

外国人客 2

修学旅行生 1 …… 女子中学生

修学旅行生 2 …… 女子中学生
田村 (53) …… ホテルの客
女性客 (27) …… ホテルの客
中学生 1
中学生 2
中学生 3
パーティー客
ヤクルトファン
レナ (6) …… 歩の姪

○公園・(夕方)

高校生のカップルがベンチに座って仲睦まじくクレープを食べている。

○マンション・ベランダ

五階のベランダの隅にしゃがみ込んで、カップルを虚ろな目で見ている一色歩(22)。

向かい側の隅にしゃがみ込み、タバコの煙を吐く木原葵(22)。

室外機の上に灰皿が置いてある。

葵「私達もあんな感じだったのかな？」

歩「……」

葵「ああやって寄り添い合って、何をしてても笑いあって」

歩「……うん」

葵「私は思い出せないけど。デートに誘うのも、手をつなぐのも、キスをするのも私からだったじゃん？」

歩「そうかな？」

葵「私のこと欲しいと思ったことある？ 会
いたって思ったことある？ 歩は何で私
と付き合ったの？」

歩「……」

葵「私が『付き合って』って言ったから？ 答
えてよ」

歩「……うん」

葵、呆れ果てる。

葵「そう、じゃあ、もういいよ。何か言いた
いことある？」

歩「タバコ、やめた方がいいよ」

葵「始めたの付き合ってからなんだけどね」

歩「ごめん」

葵「今まで優しくしてくれてありがとう」

葵、タバコを灰皿で消し、部屋の中に

入ろうとすると

葵「今まで誰かを好きになったことある？」

一人取り残された歩がしゃがんでいる。

○同・外

マンションの敷地を振り返りもせず出て行く歩。

暗く落ち込んだ表情。

○歩のアパート・外

小さな二階建てのアパート。

郵便受けから封筒を取り出す歩。

封筒を開けると、『不採用』と書かれた

通知を見てため息をつく。

○タイトル

○バー店内・(夜)

少し混んでいる店内。

店長の飯田(39)がシェーカーを振っている。

カウンターに高級ブランドに身を包んだ芦原洋子(45)がカルーアミルクを飲んでいる。

洋子、カクテルをトレーに乗せ立ち働

いているバーテン姿の歩を目で追っている。

洋子、飯田に目配せする。

テーブルで客の対応をしている歩。

客に頭を下げ、

歩「お待たせしました。ジントニックです。

ごゆっくりどうぞ」

トイレの前で洋子が手を挙げる。

洋子「お兄さん、ちょっと」

歩、洋子の元に行く。

歩「はい、どうかされましたか？」

洋子、歩の唇に突然キスをする。

歩、驚き、後ずさり、口を拭う。

洋子「インランドホテル1021」

歩「あの」

洋子、笑みを浮かべる。

腕が震えてエプロンの裾を掴み、立ち

尽くしている歩。

飯田に金を払い出て行く洋子。

○同・洗面所

歩、口紅を洗い落としている。

×

×

×

(フラッシュバック)

カラオケボックスで赤い口紅をつけた

女子中学生が笑っている。

×

×

×

呼吸を整え顔を上げると、鏡に中学生の男の子が立っているのを見て、驚き振り返ると、飯田が立っている。

歩「すみません。すぐ戻ります」

飯田「今日はもういいぞ」

歩「でも、まだ時間じゃ」

飯田「それより今のお客様さんとこ絶対に行けよ。フロントにはレストランで待ち合わせ

って言えばいいから」

飯田、出て行く。

困惑した歩が取り残されている。

○インランドホテル・外観

十二階建ての高級ホテルを見上げてた
め息をつく歩。

○同・エレベーター内

階数表示の数字がどんどん上がって
いく。

歩の表情はどんどん曇っていく。

○同・1021号室

ドアをノックする歩。

ガウンを着た洋子が出てくる。

洋子「来てくれた」

歩「……はい」

洋子「入って」

歩、中に入るとスイートルームであ
り、窓の外には東京の夜景が広がって
いる。

洋子「何か飲む？」

歩「いえ、結構です。あの僕に何か？」

洋子「私の相手してやってくれて、店長に

言われたんでしょ」

歩、目を逸らす。

洋子、歩をベットに押し倒す。

馬乗りになる洋子。

洋子「いじめたくなる顔してるね。よく言われるでしょ」

歩「いえ」

洋子「可愛い」

歩にキスする。

歩の視界に一瞬ノイズが走る。

○バッテイングセンター

力任せにバットを振っている歩。

尻ポケットには万札が数枚入っている。

フラフラと安定していないバッテイン

グフォームで空振りしている歩。

呼吸が乱れる歩。

ヒットを打つ音が聞こえてくる。

歩、別のレーンを見るとゴスロリのワンピースを着た少女ルルー（20）が

ヒットを打っている。

小気味よくヒットを打つルルー。

真剣な眼差しと美しいフォームに見とれてしまう歩。

視線に気づいたルルーが顔を上げると、

歩と目が合う。

歩、慌てて目を逸らす。

歩、バッテイングを再開し、空振りし

始める。

ルルー「バットをもっと短く持った方がいい

よ」

歩、突然のアドバイスに驚き、言われ

たように構え直す。

バットを振るが空振り。

ルルー「バットの芯に当てるのを意識して」

バットを振るとヒットになる。

歩、ルルーを見る。

ルルー「やったね」

歩、笑う。

ボールが通り過ぎて行く。

×

×

×

ベンチに座ってジュースを飲んでいる

歩とルルー。

ルルーの横には日傘が立てかけられて
いる。

ルルー「ありがとう。奢ってくれて、でも、

いいの？」

歩「バッティング教えて貰ったから」

ルルー「野球好きなの？ どこファン？ ヤ

クルト？」

歩「あんまり詳しくなくてストレス発散で」

ルルー「そっかあ。そうだ」

ルルー、バッグの中からフライヤーを

取出し渡す。

ルルー「これ、もしよかったら来ない？ う

ちのグループが出るんだ」

歩、フライヤーを見ると5人組のアイ

ドルグループの隅にルルーの顔と名前

が載っている。

歩「ルルー」

ルルー「私の名前。来てくれたら嬉しいな」

歩「うん！ 行くよ。」

ルルー「本当」

ルルー、微笑む。

○アパート・歩の部屋・（早朝）

閉められたカーテンの隙間から日差しが差し込んでいる。

狭いが、整理された部屋であり、本棚にはフランス語の辞書や小説、通訳・翻訳に関する本などが置かれている。

歩、パソコンの動画サイトでアイドルグループ『エンジェリカ』エンジェリカ』のPVを見ている。

ルルーのソロ部分を何度も繰り返し聴いている。

○ハンバーガーショップ

混んでいて慌ただしい店内。

レジ打ちをしている歩。

商品を客に渡す。

歩「ありがとうございます」

店内にゴスロリの格好をした少女が入って来る。

歩、視線で追うがルルーではない。

歩、がっかりした様子でレジ打ちに戻る。

○インランドホテル・1021号室

ベットに横たわって目を腕で隠している歩。

ルルーのソロパートを口ずさむ。

洋子「なあに、その曲？」

○ライブハウス

物販が行われている。

歩、CDやタオル、生写真などのグッズが置かれているのを見て、スタッフに

歩「『エンジェリカ』エンジェリカ』のグッズ

全部下さい」

スタッフ1が袋に詰めていくのを嬉しそうに見ている。

スタッフ2、電卓をたたき

スタッフ2「3万3500円になります」

歩、躊躇なく財布から4万円出す。

× × ×

『エンジェリカ』エンジェリカ』が4人組でパフォーマンスをしている。

ファンたちがペンライトを振って『ミキ』や『マリエ』などと声援を飛ばし盛り上がっている。

グッズの入った袋を大事そうに抱えた歩が端で踊っているルルーを見ている。

踊っているルルーと目が合い、ルルーが微笑むと、歩、思わず飛び跳ね

歩「ルルー！」

客とぶつかり、頭を下げる歩。

× × ×

リーダーのミキがMCをしている。

ミキ『また来たよ』の人も『お久しぶりです』の人も『初めまして』の方もいらっしやると思うんですが、今日はL I V Eに来ていただいでありがとうございます」

客、湧く。

全く聞いておらず、隅の方で立っているルルーを見ている歩。

ミキ「ここで私達からご報告があります。私達『エンジェリカⅡエンジェリカ』は今日を持ちまして、解散します！」

歩の顔から笑顔が消える。

客たち、どよめく。

ミキ「それでは、最後の曲になります。『教室のスケープゴート』聞いて下さい」

曲が掛かり始める。

○ 駅のホーム・(夕方)

ベンチに座り、グッズの袋を抱え途方に暮れている歩。

駅員がやって来る。

駅員「（心配そうに）大丈夫ですか？」

歩「あっ、はい」

駅員「どこまで行かれますか？」

歩「ええ、大丈夫です。多分」

駅員去っていく。

電話が掛かって来る。

『飯田さん』と表示される。

歩「はい、一色です」

飯田「今日なんだけどな」

歩「あの、今日、僕」

飯田「今日来なくていいよ」

歩「はい」

飯田「それよりこの間のお客さんところにさ」

グッズの袋の中にあるマイクロファイ

バータオルに写されたルルーの目を見

る。

歩「嫌です」

飯田「あん？」

歩「もう嫌です。あんなこと」

飯田「あんな」

歩『行け』って言うんだったらバイト辞めま
す」

飯田「……あの人さ、去年旦那さん亡くされ
たんだよ」

歩「え？」

飯田「寂しいって言ってたよ。お金があつて
も広い家に一人きりでさ。話相手がほしい
って言ってたよ」

歩「でも」

飯田「なあ、俺からも頼むよ。向こうにはこ
れが最後だって言うっておくからさ」

○（回想）住宅街・（夕方）

中学生の歩（13）が口元に赤い染み
を付けて、石段を昇っている。

歩、立ち止まり泣きべそをかきそうに
なると

声「歩」

見上げると姉の葉が大きなバックを持
って立っている。

歩「お姉ちゃん」

微笑んでいる葉を見て、戸惑う歩。

慌てて唇を拭う。

葉「会えてよかった。私、行くから」

歩「どこに？ 帰って来るんだよね？」

葉、歩に近づき、頭を撫で

葉「女の子には優しくしてあげてね」

葉、階段を降りて行く。

歩「待って！」

葉「来ないで！ 言ったでしょ。優しくして

あげてって」

葉、階段を降りて行く。

歩、一歩も動けず、葉の背中を見つめ

ている。

○（戻って）インランドホテル・1021号

室・（夜）

ベッドの上、上半身を起こしている洋

子の背中を見ている歩。

洋子「何かあった？」

歩「はい？」

洋子「今日元気なかつたから」

歩「すみません」

洋子「謝らなくてもいいけど、もしかして何

か悩んでる？」

歩「いえ、そんなことは」

洋子「言ってくれば力になれるかも」

歩「僕、もう帰ります」

ベッドから抜け出し、下着を履きはじ

める歩。

洋子、毛布を体に巻き

洋子「待って、今、お金を……」

歩「それとこれで最後に」

突然、クローゼットから音がする。

歩、驚きクローゼットを見る。

洋子「いいの。何でもないの」

歩「でも」

クローゼットから男の悲鳴が聞こえる。

歩、クローゼットを開ける。

洋子「待って」

Yシャツにスーツのズボンを履いた芦

原保（57）が倒れこんでくる。

歩「えー！」

洋子「あなた、大丈夫」

洋子、保に駆け寄る。

保「足、足吊った」

歩「あなたって」

洋子「私の夫よ」

歩「でも亡くなったんじゃない」

洋子「あいつ、そんなこと言ったの？」

洋子、保を抱き起す。

歩、頭を抱え呻き出す。

歩「あああああああああ」

呻いている歩と保に戸惑う洋子。

○同・レストラン

閉店しているレストランで歩と芦原夫

妻が話している。

スーツを着てネクタイを締め直した保

が神妙な顔をしている。

落ち込んだ表情の歩。

保「洋子を責めないでくれ。全て私のためにやってくれたことなんだ」

洋子「ごめんなさい。あなたがいい子だったから」

保「只、撮影や録音は一切していないから安心してくれ。本当にすまなかった」

芦原夫妻、一緒に頭を下げる。

保「こんなことで許されるわけがないが、お金は以前の倍、いや3倍払おう」

歩「もういいです」

保「いや、受け取ってくれ。私は君を傷つけた」

歩「気にしないで下さい。いいんです、僕なんて」

洋子、目を伏せる。

保「どうしてそんなことを言うんだ？」

歩「どうしてって」

保、鋭い目で歩を見ている。

保「プライドは無いのか？ 君は侮辱された

んだぞ。それなのに怒りもせず、縮こまっている」

洋子「あなた」

保「その腕を伸ばして、私の胸倉を掴んで殴りつけてもいいんだ。何故そうしない？」

歩、呆気にとられている。

保「私もね、若い人と仕事をして感じるんだが、とても優秀でいいものを持っているのに覇気が無い。まるで人形みたいなんだ」

歩「あの」

保「洋子から聞いたんだが、君は大学でフランス語を学んだんだって」

歩「はい」

保「素晴らしいじゃないか。自分でもそう思わないか？」

歩「どうでしょうか？」

保「私は思うよ……確かにこの国の現状は、若い人にとって明るいとは言えないかもしれない。だが、君たちならそれを必ず打破できると思っている。私は信じているよ」

歩、情けなくなつて泣き出す。

洋子「ごめんね。この人すぐに熱くなつちやうの」

保、思いつき

保「どうだ？　ここで働いてみないか？」

歩「ここでつて」

保「このホテルだ」

歩「そんなこと勝手に」

保「構わんよ。私はこのホテルのオーナーだからな」

啞然とする歩。

洋子「そうしなさいよ」

洋子を見て、震え出す歩。

保「あんなバーのバイトは辞めた方がいい。

ロクなことにならない」

保、満足げに笑い出す。

保「ご両親も安心するだろう」

震えている歩。

洋子「お母さんに電話しなさい」

○道路

歩がフラフラとした足取りで歩いている。

携帯電話で母の圭子（53）と話している。

歩「母さん？」

圭子「どうしたの？　こんな時間に」

歩「うん、ごめん、あのね、就職が決まったんだ」

圭子「そうなの！　良かったじゃない、どんなの？　お父さんにも」

歩「あの」

前方のバッテリーセンターからヒッ

トを打つ音が聞こえる。

歩、バッテリーセンターを見る。

圭子「どうしたの？　歩、歩」

歩、走りだし、バッテリーセンターに入っていく。

○バッテリーセンター

中に入る歩。

ルルーがバットを振っている。

歩「ルルー！」

ルルー、振り返り歩を見て微笑む。

○ファミレス

歩とルルーが話している。

テーブルの上には歩側にアイスコーヒ

ーが、ルルー側にはアイスティーが置

かれている。

中央にフライドポテトが置かれている。

ルルー「ライブ来てくれたんだね。ステージ

から見えてたよ」

歩、照れくさそうに

歩「グッズもさ……あっ」

歩、手元にグッズの袋が無いことに気

づく。

ルルー「どうしたの？」

歩「いや、何でもない」

ルルー「ありがとう。でもびっくりしたでし

よ」

歩「解散ライブだったんだね」

ルルー「私達もライブの直前に知らされたんだ」

歩「そうなの？」

ルルー「プロデューサーがメンバーの子とお金持って逃げちゃったんだ。事務所も閉めるって。結構頑張ったんだけどな」

歩「ひどいね」

ルルー「いきなり放り出されて野良猫になつたみたい（猫の手を作り）『ニャー』なんちゃって」

歩、思わずニヤケてしまう。

○ゲームセンター

歩、UFOキャッチャーでヌイグルミを取ろうとしている。

真剣な眼差しの歩と期待しているルルー。

ヌイグルミを受取口に落とす。

ルルー「やったー！　すごい、歩」

照れくさそうに笑う歩。

ルルー、ヌイグルミを抱きしめ

ルルー「今日からうちの子だよ」

歩、見惚れている。

○カラオケボックス・廊下

二人分のジンジャエールを持って歩いている歩。

部屋から『初めてのチュウ』が聞こえてくる。

突然、震え出す。

コップから飲み物が零れる。

視界にノイズが走る。

○（回想）カラオケボックス2・個室

中学一年の歩が、先輩の島永翠（15）を振り切る。

歩の口元に真っ赤な口紅がついている。

周りを女子中学生たちが笑いながら見

ている。

歩、恐怖に引きつりながら

歩「何で、いきなり、こんなこと」

翠「3千円」

歩「えっ？」

翠「キスしてやったんだから三千円払えよ」

中学生たちが爆笑している中、怯えて

いる歩。

不敵な笑みを浮かべている翠。

○（戻って）カラオケボックス・廊下

歩が震えている。

前方の個室からルルーが顔を出す。

ルルー「歩」

歩、我に返る。

ルルー「どうしたの？ こぼしちゃったの？」

歩「あ、ああ、ごめん、また持ってくる」

ルルー「私が行くよ」

歩「でも、床も拭かなきゃいけないし」

歩、廊下を引き返す。

○同・個室

ルルー、「やさしい気持ち」を歌っている。

歩、落ち着きを取り戻し、歌声に聞き惚れている。

歌い終わると、歩、拍手する。

歩「すごい！ 上手いんだね」

ルルー「そんなこと……でも、こういうの大学でもグループでも歌わないから気合入っちゃった」

歩「何でアイドルになったの？」

ルルー「アイドルが好きで、小さい頃から見たいし」

歩「だよね」

ルルー「それとさ、私、色々とダメなんだ」

歩「ダメ？」

ルルー「高校生の時にさ、クラスの子が先生と付き合ってた、それ聞いて『やだなあ』って、男の人と付き合うというのが気持

ち悪くなっちゃって」

歩「……そうなんだ」

ルルー「私達ぐらいの年になるとき、付き合い合ったことがあるかとか急に大事になってくるじゃん。話題もそればかりになるし」

歩「……うん」

ルルー「でも、アイドルになったらそういうのダメでしょ」

露骨に落ち込んでいる歩。

ルルー「でも歩は違うかも」

歩「本当？」

ルルー「歩は何かそういうのとは違うんだよね。男の人って感じがしないっていうか」

歩「(落ち込み) そう」

バラードが流れているのに気づきスピ

ーカーを見るルルー。

ルルー「この曲、古い曲なんだけど今、海外で人気なんだって」

ルルー、歩の肩に頭を載せる。

眠そうなルルー。

ルルー「少しこうしてていい？ 最近眠れなくて」

歩「うん」

ルルー「落ち着く」

ルルー、目を閉じると歩も目を閉じる。

○（歩の夢）電車・（夕方）

強烈な夕暮れの陽ざしが差し込んでいる。

シートに座っている歩。

真正面に中学一年の歩が座っている。

中学歩「ようやく会えたね」

歩「君は？」

中学歩「忘れちゃったの。僕は君だよ」

歩「どういうこと？」

中学歩「酷いな、君が最近変だから会いに来たのに」

歩「そんなことないよ」

中学歩「変だよ。浮かれちゃってさ。ルルーをどうしたいの？」

歩「どうしたいもこうも」

中学歩「さっきの話聞いただろ？ ルルーは

誰とも付き合いたくないって」

歩「僕だって別に」

中学歩「嘘だね。外を見てごらん」

歩、振り返り窓の外を見ると、巨大な

怪物が町を破壊している。

中学歩「可哀そうにルルーを思ってたんなら

苦しんでいる」

歩「あれは？」

中学歩「君だよ。君は心にあんな怪物を飼っ

ているんだ」

歩、怯えている。

中学歩「あの町みたいにルルーを」

歩「違うよ！」

中学歩「ねえ、こう考えて見たら、ルルーな

んて初めからいないって、慰めてもらいた

い君が作った妄想だって」

歩「そんなことない」

中学歩「あんな天使みたいな子がいると思

う？ 全部君の妄想なんだから好きにすればいいのに」

歩「ルルーはいるよ！」

中学歩「君は解放されたいだけなんだよ」

歩の頬にキスマークが浮かび上がる。

中学歩「そのキスマークから」

キスマーク「キスしてやったんだから3千円払えよ」

怪物が咆哮する。

○（戻って）カラオケボックス・個室

歩、ビクツとして目を覚ます。

隣でルルーが眠っているのを見て安心する。

ルルー、目を覚まし、歩が汗だくなのに気づく。

ルルー「どうしたの？ 汗ビッシヨリだよ」

ルルー、ハンカチを出し、額の汗を拭く。

歩「昔、カラオケで嫌なことがあって、それ

思い出しちゃって」

ルルー「怖かったね」

歩の頭を優しく撫でる。

○インランドホテル・従業員通路

タイムカードを切っている歩。

横からグッズの入った袋を差し出す洋子。

洋子「これ忘れて行ったでしょ」

歩、慌てて受取り抱きしめ

歩「見たんですか？」

洋子、首を傾げ、意味深に笑う。

洋子「ロッカーに制服があるから、着替えた
ら十二階のオーナー室に行っただね」

洋子、去っていく。

○同・オーナー室前

ボーイの格好をした歩、ドアを叩く。

保の声「どうぞ」

歩、ドアを開けると、保がデスクに座

っており、その横にはボーイの荒藤巴
春（27）が立っている。

保「中々様になっているじゃないか？（荒藤に）なあ」

荒藤、微笑み頷く、

保、歩に近寄り、少し曲がっている帽子を直してやる。

保「背筋を伸ばしなさい」

歩、背筋を伸ばす。

保「うん。改めて自己紹介しよう。このホテルのオーナーで支配人の芦原保だ。こっちは教育係の荒藤くんだ」

荒藤「よろしく」

歩、頭を下げ

歩「一色歩です。よろしくお願ひします」

保「なにか困ったことがあったら、彼に聞いてくれ」

歩「はい」

保「それとこの部屋にはいつでも来て構わないから」

歩「……はい」

保「さあ、行こうか」

○同・廊下

歩と荒藤が歩いている。

歩、メモを取っている。

荒藤「1階がフロントで、2階がパーティー会場になってて、3階から宿泊スペースになっている。11階にレストランがあるよ。何か困ったことがあっても、自己判断せずに相談すること」

段々、背中が曲がっていく歩。

荒藤「それと、やっぱり、もう少し背筋を伸ばした方がいいかな」

歩「すみません」

歩、慌てて背筋を伸ばす。

○同・1021号室

歩と荒藤がいる。

歩、苦々しい顔をしている。

荒藤「この部屋がこのホテルの最高級の部屋。

どうだ？　こんな部屋見たことないだろ」

クローゼットを目にしてしまう歩。

歩「……はい」

荒藤、窓の景色を見ながら

荒藤「こういう部屋に女の子と泊まってみた

いよな」

歩「……はい」

荒藤「一色君はこの辺りに土地勘ってある

か？」

歩「いえ、あんまり」

荒藤「ある程度、頭に入れといた方がいいぞ。

結構聞かれることも多いから」

歩「わかりました」

荒藤「あれが大使館で、あれが国際センター。

そして、あれが……俺んち」

歩、吹き出す。

荒藤「ようやく笑ったな。そんな固くならな

いで気楽にいこうぜ」

歩「ありがとうございます」

荒藤「それで、今までのところで何か質問あるかい？」

歩「あの……オーナーってどんな方なんですか？」

荒藤「お客様第一主義、何をするにもお客様が優先、その次が俺たち従業員だつてさ。そんな人だよ。ここは福利厚生もしっかりしているし、働くとわかるけど、この人たちは皆明るいんだ。そういう職場はいい職場だろ」

歩、訝しく

歩「はあ」

荒藤「ちよつと先にスタッフルームに戻ってもらっていいか？ 俺は後から行くから」

歩「はい」

○同・エレベーター

ドアが開き、歩が乗ると、受付の制服を着た若い女が立っている。

落ちついた雰囲気的女性。

女「新人さん？」

歩「はい、今日から入った一色歩です。よろしくお願ひします」

女「一色？」

女、歩の顔をまじまじと見て

考え込む。

歩「あの」

女「あー！ 一色だ！」

歩「えっ？」

女「私だよ。覚えてない？ 島永翠」

× × ×

(フラッシュバック)

カラオケボックスで真っ赤な口紅を付けて邪悪な笑いを浮かべている島永翠。

× × ×

歩、恐怖で顔が引きつる。

歩、慌てて直近の階のボタンを押そうとすると、翠が歩の手首をつかむ。

翠、顔を近づけ、邪悪な笑いを浮かべ

翠「思い出した？」

歩、顔を背ける。

翠「久しぶりじゃん。元気だった？」

ドアが開く、翠、舌打ちし

翠「またね。歩」

取り残される放心状態の歩。

○同・レストラン・（早朝）

時間が早いため誰もいないレストラン
で食事をしている芦原夫妻。

洋子「また谷口社長から電話があったの。復
帰しないかって」

保「谷口さんには悪いことをしたな。どうな
んだ？ 君がその気なら」

洋子、首を振り

洋子「いいのよ。私はもう年だし、それに今
の生活に不満は無いの？」

保「そうか」

洋子「どう、歩の調子は？」

保「頭のいい子だが、なんというか」

洋子「自信が無い」

保「ホテルマンはいつでも堂々としていなければ」

洋子「大丈夫よ。あなたが見込んだ子ですもの」

保「（笑みをこぼし）そうか」

洋子「それに翠ちゃんの後輩らしいの」

保「それは心強いな」

洋子「ジュース飲む？」

保「ああ」

翠、周囲に誰もいないのを確認すると

ヒールを脱ぎ、その中にオレンジジュ

ースを注ぎ、保に渡す。

保、一気に飲み干す。

翠、笑っている。

○同・従業員用通路

男子更衣室から恐る恐る顔を出す歩。

荒藤が入社してくる。

荒藤「おう、早いな、歩」

歩、ホッととして

歩「おはようございます」

荒藤の背後から翠が出てくる。

歩、怯える。

翠「おはよう」

歩「(震え) おはようございます」

翠、タイムカードを押し、女子更衣室に入っていく。

荒藤「どうした？」

歩、震えている。

○同・廊下

歩、客室から出てくる。

歩「失礼します。ごゆっくりお過ごしください」

歩き出すと、背後から翠が近づいてきて、膝カッコンをする。

歩、崩れ落ちる。

楽しそうな翠。

翠「本当、リアクションが最高だよね」

歩「……」

翠「どう調子？」

歩「……ハイ」

翠「元気ないな？ 今度飲み行こうよ」

歩「それは命令ですか？」

翠「何それ？ まあ、いいや」

翠、去っていく。

歩、ため息をつき、立ち上がり、服を
払う。

○大学・声楽科・(夕方)

教室からテキストと楽譜を抱えたルル
ーが出てくる。

ルルー「ありがとうございます」

ルルー、携帯を取出し、操作し始める。

○牛井屋

歩、カウンター席に座っている。

元気のない歩。

電話が鳴り、表示を見て嬉しくなり電

話に出る。

歩「もしもし……今、大丈夫だよ。うん、ご飯はまだ食べてないけど、気になるお店？」

店員、歩の前に牛丼を置く。

店員と目が合う。

歩「うん、わかった。あとでね」

歩、気まずそうに牛丼を食べ始める。

歩「いただきます」

○2件目の牛丼屋

牛丼が置かれている。

テーブル席で向かい合っている歩とルルー。

ルルー「並盛でいいの？ 足りる？」

歩「うん、大丈夫だよ」

ルルー、歩の器に牛肉を一切れ移してやる。

ルルー「あげる」

必死な笑顔で

歩「ありがとう」

ルルー「実は私、牛井屋さんって初めてで、前から気になってて」

歩「そうなんだ」

ルルー「今日は大丈夫？　バイトって何時から？」

歩「仕事決まったんだ」

ルルー「そうなの？　どこで働いているの？」

歩「ホテルなんだけど、あっ、そういうホテル

ルじゃないよ、ちゃんとした（自信なくす）

：：ホテルでインランドホテルっていうんだけど」

ルルー「すごいね。そのホテルって海外のミ

ュージシャンとかも来たりするの？」

歩「どうだろう？」

ルルー「ビリー・アイリッシュに会ったらサ

イン貰ってきてよ」

歩「え！」

ルルー、笑いだし

ルルー「冗談だよ。真面目なんだから。でも

ホテルって大変そうだね」

歩「うん、でも奨学金も返さなくちゃいけないし。そんないい大学に行ってたわけじゃないのに何やってんだろって感じだけど」

ルルー、首を振る。

ルルー「でもその勉強が好きだったんでしょ」

歩「通訳とか翻訳の仕事をしたかったけど、それもダメで」

ルルー「私みたいな子甘ったれてるって思うよね。親のお金で音大行って、一人暮らしして、アイドルなんてやって」

歩、首を振る。

歩「思わないよ！人はそれぞれ事情が違うから」

ルルー「そう」

○ビリヤード場

ルルー、危うげにキューを構えている。

隣に一緒に構えている歩。

歩「真正面から狙って、膝を伸ばさないうで少

し曲げた方がいいよ」

ルルー、指示通りの姿勢になる。

ルルーの指に触れてしまう歩。

歩「ごめん」

ルルー、笑って

ルルー「何で謝るの？」

ルルー、真剣な表情に戻り、球を打つが、ミスショット。

ルルー「ああ、ビリヤードって難しいね」

歩「でもバッティングが出来るんだからすぐ

出来るようになるよ」

ルルー「そうなの？」

歩「道具は似たようなもんだしさ」

ルルー「そっか」

歩につられてルルーも笑う。

○神社

恋愛成就の幟から顔を出すルルー。

ルルー「わっ」

歩、ふざけて

歩「わー」

二人、笑いあう。

×

×

×

手洗い所で歩、手を洗っているとルル
ーが柄杓で水をかける。

ルルー「お浄めじゃー」

歩、笑い

歩「やめて、やめてよ」

×

×

×

社の前で手を合わせている歩とルルー。
ルルーの横顔を見ている歩。

歩「何お願いしたの？」

ルルー「今度、学校内でオーディションがあ
るの。それに受かりますようにって」

歩「受かるよ」

ルルー「ありがとう」

×

×

×

石段を降りて行く歩とルルー。
ルルー、立ち止まる。

歩「どうしたの？」

ルルー、『夜の女王のアリア』のフレーズを歌いだす。

見惚れている歩。

○ 駅のホーム

終電間近のホーム。

歩、上機嫌で立っている。

スーツを着て酔っぱらった男、森田（2

6）がやって来る。

森田「よう、久しぶりだな。一色」

歩「森田さん？」

森田「こんなところで会うなんてな。それにどこ
機嫌だな」

歩、萎縮し

歩「はい、すみません」

森田「もう次の女でも見つけたか？」

歩「え？」

森田「葵に随分ひどいこと言っただけだな」

歩「そんなこと」

森田、歩の胸倉を掴む。

×

×

×

(フラッシュバック)

祭りの屋台や御神輿が思い出される。

突然、水飛沫が視界を遮る。

×

×

×

森田「好きじゃなかったって何だ？」

歩を殴る。

倒れこむ歩。

森田「舐めてんじゃねえぞ」

森田、去っていく。

○インランドホテル・従業員用通路

洋子が携帯電話で話している。

洋子「社長、何度も言うけど私はそっちの世

界に戻るつもりはないわ。うん、瀬野洋子

はもういないの」

洋子、電話を切る。

歩、出社してくる。

歩「おはようございます」

歩の顔を見て

洋子「おはようってどうしたの？」

○同・オーナー室

洋子の手当てを受けている歩。

保が心配そうに見ている。

洋子「すごい。こんなに腫れて」

歩「その人アメフト部だったんです」

保「何でそんな奴と」

歩「言いたくありません」

保「そうか……ところで洋子から聞いたんだ

が、君の実家はあの『志ノ家』なのか？」

歩「はい、もう閉めましたけど」

保「そうか。私もあの料亭は良く使わせても

らったよ。外国からきたお客さんを連れて

行くと皆喜んでくれたよ」

洋子「お酒もいいのを揃えてたし」

保「どこかで繋がっているもんだな」

歩、俯いて聞いている。

保「今度、君のご両親に挨拶に行きたいんだ
が？」

歩「口封じですか？」

保「何言っているんだ。歩は東京で頑張ってますって報告するんだよ」

歩「いいんですよ。今、八王子にいるんですから」

保「正直、私は心配しているんだよ。今日みたいなのがあると、歩は私にとって息子みたいなものだからな」

歩、保の股間を見て、目を逸らし

歩「僕、父親に困ってないんで」

○同・オーナー室外

歩、出てくる。

歩「失礼します」

翠が立っているのを見て、驚く。

翠「喧嘩したんだって」

歩「これは」

翠、近づき

翠「男らしいところあんだね。見直したよ。(絆創膏を見て)うわー、痛そう、あのさ」

歩「失礼します」

走って去っていく歩。

廊下の隅で荒藤が見ている。

○同・パーティー会場

袖の無いアメリカンポリスの格好をした男たちが『ブルドック』を歌いながらパフォーマンスをしている。

スーツを着た男たちが、楽しそうに聴いている。

会場の隅のテーブルで呆れ顔で水割りを作っている歩。

男が近づいて来る。

パーティー客「お兄さん、新人さん」

歩「はい」

パーティー客「今日見たことは他言無用に頼むよ」

歩「はい」

パーティー客、水割りを持って帰っていく。

×

×

×

スポットライトの中、赤いドレスを着
た洋子がマイクを持ち、『地上の星』を
歌いだす。

洋子の歌声に聞き惚れている客たち。
歩も聞き入っている。

洋子「ツバメよ、高い空から教えてよ。地上
の星を」

歩、苦い顔をする。

洋子「ツバメよ、地上の星は今どこにあるの
だろ」

×

×

×

(フラッシュバック)

1021号室で、上半身裸の歩が夜景
を見ている。

後ろから洋子が抱きしめる。

×

×

×

歌が終わり、スタンディングオベージ
ョンの万雷の拍手の中、頭を下げる洋
子。

苦い顔をしている歩。

× × ×

会場の後片付けをしているスタッフたち。

歩がテーブルを片付けていると、袖をまくった保がやって来る。

保「歩が酒を作れてよかったよ」

歩「水割りだけですよ」

保「それにしても、毎回毎回下品な奴らだ。

あれが警察だっていうんだから世も末だな」

歩「ここ、お任せします」

ゴミ袋を持って歩き出すと、翠がやって来る。

翠「すごかったでしょ、洋子さん」

歩「はい」

翠「今度さ、うちの近所でお祭りがあるんだけど、良かったら行かない？」

歩「お祭りですか？」

歩、震え出す。

翠「まあ、小さいお祭りなんだけどさ。どう？」

歩「……はい」

テーブルの下にいた荒藤が二人を見て
いる。

○ 駅前・(昼)

遠くから祭囃子が聞こえてくる。

歩、気を落ち着かせようとして、必死
に腕を擦っている。

翠「お待たせ」

翠が浴衣を着て立っている。

一瞬見とれてしまう歩。

翠「ごめんね。着付けに時間かかっちゃって。
甚平でいいって言ったんだけど、洋子さん
が」

歩「洋子さん？」

翠「そう、洋子さんに貰ったんだ。あのホテ
ルの人たちって家族みたいだからさ」

歩「そうですか」

翠「行こうか？」

二人、歩き出す。

○祭り

屋台と人ごみの中を歩いている歩と翠。

翠、リンゴ飴を食べている。

歩、浮かない顔で歩いている。

×

×

×

お面の屋台でウルトラマンのお面をつけた翠が、歩にスペシウム光線の構えを向ける。

歩、苦笑い。

×

×

×

水風船の水槽の前にやって来る歩と翠。

歩、震え出す。

翠「あれ、私、得意なんだよね」

翠、水槽の前にしゃがみ込む。

歩の視界に、水槽に中学歩が入っている。

中学歩「やあ」

歩「……」

中学歩「また違う女の子連れてくるの？ し
かもこの人って」

歩「違うよ！」

中学歩「また断れなかったんでしょ。こんな
お祭りに来て忘れてないよね？ 中二の夏
に話したことも無い女の子に誘われて」

○（回想）歩の地元のお祭り

中学二年生の歩が同級生の少女と歩い
ている。

後ろから声が聞こえる。

声「おい」

振り向くとラガーシャツを着た高校生
が立っている。

ラガーシャツ「お前何してんだよ？」

歩の胸倉を掴む。

お祭り女子「お兄ちゃん」

歩「お兄ちゃん？」

ラガーシャツ「どういふつもりで、人の妹連
れ回してんだよ」

歩「僕は誘われただけで」

ラガーシャツ「こいつが悪いってのか？」

歩「悪いとかじゃなくて」

お祭り女子「お兄ちゃん、やめて」

ラガーシャツ「ふざけんな！」

ラガーシャツ、歩を殴る。

歩、吹っ飛び水風船の水槽に突っ込む。

テキ屋「おい、何してんだ？」

ラガーシャツ「おい、行くぞ」

お祭り女子「待って、お兄ちゃん」

兄妹行ってしまう。

○（戻って）お祭り

歩が立ちすくんでいる。

翠「ねえ！」

翠、手には水風船を持っている。

歩、我に返る。

翠「どうした？　ボーっとしちやって」

歩「いえ」

翠「調子悪いの？」

歩「昔、お祭りで絡まれて殴られたことがある
って」

翠、笑い

翠「何、それ？」

歩「そうですね」

○駅前

翠、水風船を渡す。

翠「これあげるよ。今日の思い出だよ」

歩「……ありがとうございます」

翠「私、これから仕事でさ」

歩「そうなんですか？」

翠「今日はありがとう。楽しかったよ」

翠、手を振り去っていく。

○歩のアパート

水風船を弾ませながら、陰鬱に歩が帰
って来ると、ドアの前に葵が立ってい
る。

ゴムが切れ、水風船が落ちて割れる。

葵「森田に殴られたんだって」

歩「……うん、まあ」

葵「ごめん。あんな人だって思わなくて、大丈夫だった？」

歩、怯えた目で葵を見ている。

葵「ごめん。顔なんて見たくないよね」

葵、去っていく。

○同・部屋

歩、中に入ると中学歩が立っている。

中学歩「いいの？ あの子何か話したいことがあったんじゃないの？」

歩「うるさい」

中学歩「女の子には優しくしろっていわれたんじゃないの？」

歩「うるさい！」

歩、布団に潜り込む。

○インランドホテル・ロビー・(昼)

修学旅行の中学生たちが座り込んでい

る。

教師「それぞれの部屋に着いて荷物を置いたら、班長は報告しに来てください」

荒藤と歩が並んで立っている。

荒藤「修学旅行って厄介なんだよ。他のお客様からはクレームが入るし、ボヤは出すし」

歩「ボヤ？」

荒藤「タバコ、隠れて吸ってたよ。気持ちわかるんだけどな。歩も気をつけろよ。

からかわれやすいんだから」

歩「そう見えます？」

荒藤「ああ、翠にもからかわれているんだろ」

歩「はい、まあ」

荒藤、満足そうに笑う。

○同・客室

歩、ルームサービスの食事の片付けをしている。

あまり手が付けられていない食事。

黒人のゲイの中年カップルが座ってい

る。

フランス語で話しはじめる。

外国人客1「今日は随分賑やかなんだな」

歩「お騒がせしてすみません。中学校の旅行
なんです」

外国人客1「災難だな」

外国人客2、思いつめた表情。

外国人客2「今日は部屋を出るのはやめよう」

外国人客1「いいのか？」

外国人客2「馬鹿にされたくない」

ナーバスになっている客2に寄り添い、
手をさすってやる客1。

それを羨望の眼差しで見ている歩。

外国人客1「君、明日、日本を発つんだが、

近くで静かに過ごせる場所は無いかな？」

歩「それでしたら新宿御苑はいかがでしょう
か？」

外国人客1「(言いにくそうに)シンジユク：

：

歩「御苑」

客たちがスマホで検索しようとするが、
扱いにくそうにしている。

歩「今、行き方を書きますので」

ボールペンを出し、メモに書き始める。

○同・廊下

歩、客室から出てくる。

歩「(フランス語で)ごゆっくりお過ごしください」

前方に女子中学生が2人が歩いている。

修学旅行生1「ねえ、明日浅草寺に行こうよ」

修学旅行生2「えー、ドームシテイは？」

修学旅行生1「絶対、浅草の方がいいよ。御

朱印欲しい」

修学旅行生2「やだよ。お寺なんて、パンダ

見に行く」

修学旅行生たちが突然、振り返り

修学旅行生1 & 2「ねえ、一色君はどっちと

行くの？」

歩の視界にノイズが走る。

修学旅行生 1 「私とこの子どっちと行くの？」

修学旅行生 2 「私と行くって言ったじゃん」

歩 「それは」

修学旅行生 1 「先に約束したのは私でしょう」

修学旅行生 2 「勇氣出して、一色君に声掛け

たんだよ」

歩 「だから、午前と午後に分けて」

二人の表情に落胆と蔑みの色が現れる。

修学旅行生 1 「最低」

修学旅行生 2 「そんな人だと思わなかった」

歩、頭を抱えしやがみこむ。

歩 「ごめんなさい。ごめんなさい」

○（回想）ホテル・レストラン

ジャージ姿の中学生たちがビュッフェ

スタイルの食事をとっている。

中学歩がトレイを持ってテーブルにつ

こうとすると、

中学生 1 「おい、座んなよ」

中学歩 「でも、ここ僕の席」

中学生2 「お前みたいな奴と一緒に食いたくないんだよ」

中学生3 「どっか他行け」

中学歩、見渡すがどこも空いていない。

修学旅行生の二人が睨み付けている。

歩の耳に声が聞こえてくる。

声1 「あいつ、最低」

声2 「どっちにもいい顔しようとしたんでしょ」

声3 「ていうかあいつの姉ちゃんってさ」

トレイを持って立ち尽くしている歩。

○（戻って）インランドホテル・廊下

立ち尽くしている歩。

翠、後ろから声を掛ける。

翠 「どうしたの？」

歩、我に帰る。

翠 「何かされた？」

歩 「いえ、違います」

翠 「まあ、いいや。今日飲みに行こうよ」

歩「え！でもこの間」

翠「あれはお祭りでしょ。約束したじゃん。

飲みに行くって」

歩「そんな」

翠「嫌なの」

歩「…：…行きます」

翠「よし」

翠、満足げに去っていく。

○居酒屋

カウンター席で並んで飲んでいる歩と

翠。

歩、皿に一切手を付けてない。

翠「どうしたの？食べなよ」

翠、焼き鳥を串から外しながら

翠「支払い気にしてんの？大丈夫だって、

後輩に払わせたりしないから」

歩、箸を持ち、焼き鳥を掴もうとする

が、震えて上手く掴めない。

翠、レモンサワーを飲みながらしみじ

みと

翠「歩さ、覚えてる？ 昔、カラオケでさ」

歩、ビールを一口飲み気持ちを落ち着
かせる。

翠「ノリであんたを呼び出してさ。これでも
悪いことしたと思ってんだよ。テニス部も
辞めちゃうし」

歩、枝豆を掴む。

翠「でもさ、私も歩のことちよっといいなっ
て思ってなきやあんなことしないしさ」

震えすぎたせいで枝豆が勢いよく飛び
出て、床に落ちてしまう。

歩、床に落ちた枝豆を見る。

翠「まあ、甘酸っぱい思い出だね」

歩、恐る恐る視線を移すと、懐かしそ
うに微笑んでいる翠。

翠「そういやさ、葉さんってどうしてるの？」

歩「お姉ちゃんは」

翠「そう、それ、そういうところがシスコンッ
ぽくてさ。昔、葉さんと手を繋いでんの見

て、からかいたくなっただよ

歩「……」

翠「ごめん、ごめん。で、どうしてるの？」

歩「僕も知りたいです」

翠「何それ？」

歩「出て行ったんです。家庭のある人を好き
になって」

翠「駆け落ち！ やるじゃん」

歩「いえ、一人で出て行きました」

翠「栞さん、可哀そう」

○ 繁華街・(夜)

少し裏ぶれた繁華街。

歩と翠が歩いている。

翠「次、どこに行く？」

歩「まだ行くんですか？」

翠「嫌なの？ ……ねえ、あのキスの続きし
ようか？」

×

×

×

(フラッシュバック)

カラオケボックスで笑みを浮かべている中学翠。

×

×

×

歩、身震いすると、前方にルルーが立っているのを見つける。

歩「ルルー？」

ルルーも歩に気づき、嬉しそうに手を振る。

翠「メイドいやゴスロリか」

ルルーが駆け寄ってくると、翠、咄嗟に歩の腕を組む。

ルルー「歩！」

歩、突然顔をそむけ吐き、道端にしゃがみ込む。

ルルー、驚く。

翠「飲み過ぎた？ そんなに弱かった？」

ルルー「大丈夫？ どっかで休む？」

恥辱に顔を歪ませる歩。

ルルー「歩ける？」

歩「ルルー」

ルルー「どうしたの？」

歩「何か僕に命令して」

翠「何言ってるの？」

歩「靴舐めろでも金出せでもいいから何か命令して」

ルルー「しないよ。そんな酷いこと」

翠、顔を伏せる。

歩「ビリー・アイリッシュのサインが欲しいんだよね」

ルルー「冗談だよ、そんなの」

翠「どっかで休もう」

歩「僕に優しくしないで」

歩、走り出す。

ノイズまみれの繁華街を駆け抜けていく。

○ロータリー

虚無僧が立っている。

歩が息を切らせてやって来て、すがりつく。

歩「どうすれば苦しまないですみますか？」

虚無僧「……」

歩「もうグチャグチャで自分が何なのかかわからないんです」

虚無僧「……」

歩「どんな修行すればいいですか？ 山とか行ったらいいですか？ とにかくもう嫌なんです」

虚無僧、笠を上げ、顔を見せると中学歩である。

中学歩「やあ、また会ったね」

歩、崩れ落ちる。

○（回想）歩の実家・台所

かつて住んでいた一軒家。

中学歩と葉が並んで桃のタルトを作っている。

葉、桃を一切れ歩の口に入れる。

葉「中学どう？ 慣れた？」

歩「うん」

栞「好きな子とか出来た？」

歩「そんなのいないよ」

恥ずかしがっている歩を見て笑う栞。

栞「女の子には優しくしないとダメだよ」

○（戻って）ロータリー

たった一人で蹲っている歩を見つけた葵。

○アパート・歩の部屋・（朝）

カーテンが閉め切られて、以前よりも散らかった部屋。

無精ひげの生えた歩、ベッドの上で毛布に包まっている。

ドアを叩く音が聞こえ、外から保の声が聞こえる。

保「歩、歩、いるんだろ。どうしたんだ？ 開

けてくれ、歩」

動こうとしない歩。

保「ああ、どうも、私ですか？ 私は歩の父

親みたいなもので、ええ、あっ、大家さん
なんですか？ お世話になってます」

歩、ドアを見ていると鍵が開けられる
音がする。

ドアが開かれると、見ていられなくな
り壁を向く。

保、ビニール袋を持ち、部屋に入って
来る。

保「やっぱりいたか。どうしたんだ三日も休
んで」

返事をしない歩。

保、テーブルにビニール袋を置き

保「これ弁当、どうせろくに飯も食ってない
んだろ」

歩「いりません」

保「今半だぞ」

歩「いいです」

保「まあ、気が向いたときに食べたらいい」

保、並べられた『エンジェリカⅡエン
ジェリカ』のグッズを見て

保 「意外だな。こういうのが好きなのか？」

歩 「触らないで下さい」

保 「今度、俺もコンサートとかに連れていってくれよ」

歩 「……そんなに自分のことをいい人間だっ
て思わせたいですか？」

保 「うん？」

歩 「物わがりのいい顔をしているけど、皆、
あなたの本性を知らないだけじゃないです
か？ 知ったらあなたを軽蔑しますよ。奥
さんを他の男に抱かせて」

保 「あのことか？」

歩 「どうしてあんなことが出来るんですか？」

保、ベッドの上に座る。

保 「私はね、高校を卒業して田舎を飛び出し
て、アチコチのホテルや旅館に住み込みで
働いた。一言では言い尽くせない苦勞をし
たよ。馬車馬のように働いてホテルを建て、
愛しい妻も得た。順風満帆なのに、自分の
胸にポツカリと穴が開いているのに気づい

た。これから、ホテルを大きくしていけばいいのに活力が湧かない。恐らく満たされてしまったんだろうな。社長だ、オーナーだと言われている内に若い頃にあった悔しさや『見返してやろう』みたいなものを感じていない自分に気づいたんだ。ビジネスマンが自分を向上させるためには、そんな感情が一番大切なのにな。そこで洋子に相談してみた。そしたら洋子は言ったよ。『私以外の誰かに抱かれたらどうなの？』ってね」

保、カーテンを開け、遠くを見つめる。

歩「ドMですね」

保、携帯電話を取り出す。

歩「変態ですね」

保、操作し始める。

歩「サイコパスですね」

保、電話口に

保「ああ、私だ、大丈夫だ、会えたよ」

歩に電話を渡す。

翠の声が聞こえてくる。

翠「歩！」

歩「……はい」

翠「もう心配したんだから。電話しても全然出てくれないし」

歩「はい」

翠「今度の出勤明日だよな？ 絶対来てね、絶対だよ」

歩、震え出す。

保「あいつも心配しているんだよ」

保、微笑みかける。

○インランドホテル・廊下

肩を震わせている翠に寄り添う洋子。

洋子「良かったね」

翠「はい、歩に何かあったら私」

洋子「辛かったね。あの子は少し不安定なところがあるけど、支えてあげてね」

アメリカ人の女性観光客クレア・フィールド（32）が手に荷物を持ってや

ってくる。

サングラスを外し

クレア「ヨーコ・セノ！」

駆け寄り、英語で話しはじめる。

クレア「こんなところで会えるなんて」

洋子、クレアの近さに困惑し

洋子「お客様」

翠「歩のバカ、心配かけさせて」

翠「翠ちゃん、ここでは」

クレア「あなたの大ファンなんです！」

翠、洋子の肩で泣き出す。

クレア、鞆を開けると『瀬野洋子』の

CDやレコードが入っている。

レコードを取出し

洋子「あのお客様」

クレア「サインを」

洋子、書きにくそうにサインを書き始める。

翠「ここ何日も歩のことばかり考えてて、
仕事しててもあいつの顔ばかり浮かん

で」

洋子「そう」

クレア「私はもう汚れた音楽業界を辞めよう
と、思ってたんですけど、あなたの歌を聞いて、
もう一度やってみる気になって」

翠&クレア「こんな気持ちになったの初めて
なんです！」

洋子、困惑し

洋子「そうなの」

洋子、ため息をつく。

荒藤、廊下の隅から見ている。

○歩の部屋

薄暗い中、今半の弁当を食っている歩。

咳き込む。

○インランドホテル・従業員通用口・(夕方)

歩、タイムカードを切っていると、翠
がやって来る。

翠「よっ」

歩「すみません。あの日は」

翠「大丈夫、何も聞かないよ。でも、歩に
んな可愛い彼女がいたなんてね」

歩「あの子はそういうんじゃないよ」

翠「違うの？　じゃあ、……ごめん、何も聞
かないんだったね」

歩「ありがとうございます」

翠「元気出していこうよ」

歩の肩を叩く。

○同・男子更衣室

歩、入って来ると荒藤が私服に着替え
ている。

歩、頭を下げ

歩「すみません。ご迷惑をお掛けしました」

荒藤「いいんだよ。俺も歩に最後に会えてよ
かった」

歩「最後？」

荒藤「翠のことよろしく頼むな」

歩「荒藤さん、辞めるんですか？」

荒藤 「来週末にな」

歩 「何ですか？ 急すぎますよ」

荒藤 「資金も出来たしな」

歩 「何かビジネスでも始めるんですか？」

荒藤 「……歩には夢ってあるか？」

歩 「(口ごもり) 今は別に」

荒藤 「俺はな、大学時代に登山部でな。一人で秩父の山奥に入った時に、あいつは俺の前に現れたんだ。その時の俺はもう4年なのに就職も決まらなくてさ。焦ってたんだろうな。逃げる場所を探して山に入ったんだ。静かな夜にキャンプの火を見ていると、なんだか落ち着いてさ。ポーっとしてたら、俺の前に出てきたんだよ。もう絶滅したはずのニホンオオカミが。そいつは孤高で気高くて、俺に『お前は自由か？ 生きているのか？』って語りかけてくるみたいだった。俺はもう一度、あいつに会いたくてさ。

これから本格的に」

歩 「(きつぱりと) 嘘でしょ」

荒藤「本当だよ」

歩「じゃあ、さっきの翠を頼むって言うのは

何なんですか？ 本当のこと言って下さい

よ！」

荒藤「いいんだよ！ 俺はニホンオオカミを

探しに行くんだよ」

歩「しっかりして下さいよ」

○音大・声楽科

教室から出てくるルルー。

ルルー「ありがとうございます」

携帯電話を見てため息をつく。

○インランドホテル・フロント・(夜)

外からホテルの中を覗き込むルルー。

フロントに翠が立っている。

ルルー、中に入って来る。

翠がルルーを見て、平静を装う。

翠「いらつしやいませ」

ルルー「あのー、今日、歩……一色君って来

てますか？」

翠「申し訳ございませんが、そういったことにはお答えできません」

ルルーの背後に客の田村が立っている。ソファーに酔った若い女性客が座っている。

ルルー「歩は大丈夫ですか？」

翠「申し訳ございませんが、そう言ったことにはお答えできません」

ルルー、落ち込みドアに向かって歩き出す。

田村、ルルーの格好を見て嫌悪感を露わにする。

田村「予約していた田村だが」

翠「はい、確認いたしますので、少々お待ちください」

ルルー、女性客を覗きこむ。

ルルー「大丈夫ですか？ お水持って来ましょうか？」

女性客「ここ、どこ？」

ルルー「ホテル」

女性客「帰りたい。こんなところ嫌」

田村、書類にサインしている。

翠「お連れ様もご一緒の部屋でよろしいでしょうか？」

田村「ああ、頼むよ」

フロントに向かって

ルルー「この人帰りたいんだって！」

田村「何だ？」

翠「失礼します」

翠、フロントから出て、女性客の元に

駆け寄る。

翠「大丈夫ですか？」

田村「ちよっと飲み過ぎただけだよ。部屋で

少し休めば平気だから」

ルルー「すごく嫌がっているの」

翠「タクシー呼びましようか？」

田村、豹変し

田村「おい！」

エレベーターが開き、歩が降りてくる。

田村「いいから部屋に案内しろ！」

怒号に驚く歩。

ルルー、歩に気づく。

ルルー「歩！」

歩「ルルー、どうして？」

田村「どういうことなんだ？ 客を泊めさせ

ないつもりか？」

翠「そういうわけでは」

歩「どうされました？」

翠「……こちらのお客様が」

ルルー「無理矢理連れ込もうとしているの！」

田村「もういい！ 他を探す！ 行くぞ」

田村、女性客の腕を掴み、立ち上がり

せようとす。

歩、泣き腫らした女性客と目が合う。

歩、衝動的に腕を引き離す。

田村「どういうつもりだ？」

歩「……こちらのお客様には別の部屋かタク

シーをご用意しますので」

田村、激高し

田村「ふざけるな！」

田村、歩を殴る。

歩が吹っ飛び床に倒れこむ。

翠、歩に駆け寄る。

翠「歩」

田村「若造が！ 誰に向かって言ってるんだ！」

田村、背中に痛みを覚える。

田村「イタッ」

田村、振り返ると日傘を持ったルルーが震えて立っている。

田村「何すんだ！」

ルルー「どうしてそんなことが出来るの？」

田村「ああ？」

ルルー、日傘を構える。

歩「ルルー、やめて」

田村、日傘を掴む。

必死で引き抜こうとするルルー。

ルルー「お前なんか殴っていい人間じゃないんだよ！」

いんだよ！」

田村「頭おかしいんじゃないのか？ お前」

ルルー「うるさい」

田村、傘を離すと、ルルーが尻もちをつく。

翠、間に入り

翠「これ以上やったら警察呼びますよ」

田村、翠を睨み付ける。

田村「クズが、後悔するぞ」

田村、全員を睨み付けて出て行く。

○同・スタッフルーム

ルルー、震える手で歩の口元に絆創膏を貼っている。

歩「情けないね」

ルルー「格好良かったよ」

歩「嘘だあ」

ルルー「少し痩せた？」

歩「そうかな？」

ルルー「一回家に帰った方がいいよ」

歩「毎日帰ってるよ」

ルルー「そうじゃなくて実家、歩、疲れてい

るんだよ」

歩「……うん」

ルルー「もしかしたら気持ちも変わるかもしれないよ」

翠が入って来る。

翠「あのお客さんはタクシーで送ったから」

歩「ありがとうございます」

翠「先輩に怒られちゃった。田村さんがどんな人か知っているのか？って、私達もしかしたら」

ルルー、泣き出す。

ルルー「ごめんなさい」

歩、恐る恐る

歩「ルルーのせいじゃないよ」

○芦原家・寝室

顔を歪ませている保。

保の携帯を耳に当てる洋子。

裸で縛られている保。

保「これは、これは、田村様。どうなさいま

した？」

田村の声「どうしたもこうしたもない。お前
の所の従業員に宿泊拒否されたぞ！」

保、目が鋭くなり

保「宿泊拒否？」

○デパート・外・（朝）

私服姿の歩が歩いている。

ショーウィンドウの中で葵がマネキン
に服を着せている。

小さく手を振る歩。

気づき葵も手を振る。

○バス車内

空いている車内。

歩、外を見ている。

○（回想）歩の実家・居間

両親の前に俯いて座っている葉。

浩一郎、怒りに満ちた目を向けている。

浩一郎「お前は大学で何をしに行ってるんだ？」

圭子「あなた、落ち着いて、ちゃんと聞いてあげて」

浩一郎「聞いてどうするんだ！ やっていいことと悪いことの区別もつかない奴のいうことなんて聞いてどうする？ 男漁りに行ってる奴の話なんか」

圭子「もうやめて、葉だってそんなつもりじゃないんだから」

浩一郎「うちは客商売なんだよ！ こんなことが世間に知れたらどうなる！」

葉、頭を下げ

葉「ごめんなさい」

襖の向こうで中学歩が聞いている。

○（戻って）団地

階段を上がっていく歩。

○同・一色家

掃除機をかけている圭子。

呼び鈴が押され、出ると歩であり、驚く。

圭子「どうしたの？」

歩「元気かなって思ってた」

圭子「電話位よこさないよ」

歩「ごめん」

歩、中に入っていく。

圭子「あなた、歩が帰ってきた」

台所で料理をしていた浩一郎に頭を下げる歩。

浩一郎「ああ」

○同・居間

昼食を摂っている一色家。

食卓には太巻きやお吸い物が並んでいる。

圭子「ホテルの仕事はどんなの？ 続けられ

そう？」

歩「……うん」

圭子「でも聞いたときはビックリしたわよ。
引っ込み思案のあんたに出来るのかって、
ねえ」

浩一郎、返事をしない。

圭子「今日泊まっていく？」

歩「明日も仕事だから」

浩一郎の携帯電話が鳴る。

浩一郎、立ち上がり、食卓に背を向け

て話始める。

浩一郎「もしもし、一色です。はい、そうか、
決まったか。良かったな」

圭子「調理学校の生徒さん」

浩一郎「わかったよ、今度食べに行くから」

圭子「なんか若い人に料理を教えるのが性に
合ってるみたい。朝早くから市場に連れて
行って、食材の選び方とか教えてるの」

歩「楽しそうだね」

圭子「私も料亭の女将さんやってた頃も楽し
かったけど、今はあの人の料理を独り占め
できて、人生ってどうなるかわかんないね」

歩「うん」

○インランドホテル・エレベーター内

歩と翠が突っ立っている。

翠「心配？」

歩「はい、翠さんは違うんですか？」

翠「うーん、でも女の子一人助けられたから

いいかなって思ってる」

歩「前向きですね」

翠「このホテルで働いたのは良かったし、どうしようもない私を変えてくれたのもここだしね。ただ、勘違いされたままは嫌かなって」

○同・オーナー室

歩と翠が沈鬱な顔で立っている。

ソファーに洋子、デスクに保が腰かけている。

保「自分たちが何故呼び出されたかわかるか？」

歩&翠 「はい」

保 「田村様から電話があったよ。宿泊拒否されたと」

翠 「あの、拒否したわけではなくて」

保 「田村様はこのホテルの創業から付き合いのあるお客様だ。その方が二度とこのホテルを使わないとおっしゃってたぞ。君たちを解雇しないかぎりな」

歩と翠、目を伏せる。

洋子 「弁護士にも相談するって」

保 「……それで私から君たちに聞きたいことがある……何故、そんな風に顔を伏せるんだ？」

二人、顔を上げる。

保 「君たちはこのホテルで犯罪が行われるのを防いだんだろ？」

洋子 「女の人から連絡があったの。『助けてくださいありがとうございます』って」

翠 「私達クビじゃ」

保 「何故だ？ 君たちは人として正しい判断

を下したんだろ」

翠、耐えられなくなり泣き出す。

保「人は毎日こなしていく仕事の中で、誰かを傷つけることに加担してしまうことがある。非常に悲しいがね。そんな時に必要なのは、今回のような君たちの判断だろ」

泣いている翠の涙を拭ってやる洋子。

隣であまり信用していない表情の歩。

保「ところでよく気づいたな」

洋子「この子たちは優秀だもん」

翠「ルルーが気づいてくれたんです」

歩、驚く。

保「ルルー？」

○浅草今半・個室

歩、ルルー、翠と芦原夫妻がすき焼きを囲っている。

話しが弾んでいる一同。

洋子「宮崎先生のレッスンを受けているの？
私もお世話になったのよ」

ルルー「怒られてばかりで」

洋子「見込みがあるのよ」

歩「ルルーは歌がすごく上手いですよ」

歩、嬉しそうに菜箸で皿に取り分け、

ルルーの前に置く。

ルルー「ありがとう」

洋子「私が会った時はまだお互い若かったから、よく言いあいしたの」

ルルー「本当ですか？」

洋子「私も気が強かったし」

翠、不満げに歩を見て皿を渡す。

歩から笑みが消え、取り分け始める。

洋子「あなたの歌聞いてみたいな。この後、

暇？ カラオケ行かない？」

ルルー「いいんですか？」

歩「僕も」

洋子「この後仕事じゃないの？」

ルルー「それに歩、カラオケは」

翠「(歩に) おい！」

翠、レモンサワーのレモンを持ち、歩

の目に絞る。

歩、顔を歪め、手で覆って

歩「何で！ 何で！」

ルルー「歩、大丈夫」

保、ニコニコ笑いながら

保「ほら、ほら、喧嘩するんじゃない」

洋子「何、言ってるのよ」

○同・男子トイレ

洗面台で目を洗っている歩。

保がやって来て、手を洗う。

保「いい子だな。あの子は彼女なのか？」

歩「違いますよ。彼女は僕の……バッテリー

グコーチです」

保、釈然としないが

保「そうか。ところですまなかつたな」

歩「何ですか、いきなり」

保「君と出会った時のことだ。今回の件で分

かったよ。あんなことは君の許可なくすべ

きではなかった。君を傷つけてしまった。

改めて謝るよ」

歩、キッパリと

歩「許しませんよ。許可も出しませんし」

保「そうか……そうだよな……そうだよな」

○カラオケボックス

ルルーと洋子と翠が来ている。

『泣きたい気持ち』のイントロが流れ

始める。

ルルー「それじゃ、歌います」

ルルーが歌いだす。

笑っていた二人の顔が真剣な表情に変わる。

○インランドホテル・従業員通用口（夕方）

電話で話しながら入って来る洋子。

洋子「ああ、社長。うん、ちよつと会わせた

い子がいるの」

制服姿の歩とすれ違う。

歩「おかえりなさい」

洋子、通り過ぎてしまう。

○同・エレベーター

洋子が一人で乗っている。

英語で電話で話している。

洋子「そう、私なんかよりずっと才能があるの。うん、クレアも気に入ると思う。準備が出来たら、あなたのプロデュースとか指導を受けさせてあげたいの。それと、出来れば安く住めるところも教えてほしいんだけど」

○同・オーナー室

洋子、入ってくる。

保「お帰り。どうだった？」

洋子「あなたに相談があるの」

○球場・外野席・(昼)

ヤクルトのデーゲームが行われている。

歩、両手にジュースを持ってルルーの

隣にやって来る。

ルルー「ありがとう」

歩「やっぱり始球式やってみたい？」

ルルー「うーん、どっちかっていうと国歌斉唱してみたい」

歩「本当に歌うのが好きなんだね」

横から中年の女性が声を掛ける。

ヤクルトファン「あら、瑠々ちゃん」

ルルー「お久しぶりです」

ヤクルトファン「随分じゃない。隣、彼氏」

ルルー、歩を見て照れくさく笑う。

○東京駅・(朝)

鞆を持ったルルー、天井を見ている。

洋子が肩を叩き、微笑む。

○インランドホテル・従業員通用口

歩がニコニコしながらタイムカードを切る。

髪を明るくした翠がやって来る。

翠 「楽しそうだね」

歩 「……おはようございます」

翠、タイムカードを手に取る。

歩 「髪明るくしたんですね」

翠 「あのさ、今、褒めようとした？」

歩 「え？」

翠 「その気もないのに褒めるのとかやめてもらえますか？」

歩 「すみません」

翠 「私も、洋子さんたちと一緒にアメリカに行くことにしたからさ」

歩 「観光ですか？」

翠 「聞いてないの？ 洋子さんがルルーのためにプロダクションを作るんだって、今日ルルーの実家に挨拶に行ってるんだよ。私はルルーのマネージャーになるんだ」

歩、走り出す。

翠 「おい！」

怒りのままにタイムカードを切る。

○同・オーナー室

歩、デスク越しの保に詰め寄る。

歩「どうということなんですか？」

保「どうということとは？」

歩「ルルーの、洋子さんのプロダクションの話です」

保「ルルーの歌に感動したらしい。君も褒めてただろう」

歩「だからって上手くいくわけじゃないじゃないですか？」

保「何故、そう思うんだ？ 挑戦もしてみないうちから諦めるなんておかしいだろう。

誰だってベストを尽くせば」

歩「じゃあ、日本で尽くせばいいじゃないですか？ アメリカなんて」

保「知り合ったプロデューサーが、ニューヨークで活動しているらしい。その人もルルーの歌を聴いて『イメージングだ』だ」と

歩「オーナーはいいんですか？」

保「私は支援してやるつもりだよ。洋子は私

をずっと支えてくれたからな」

歩、納得のいかない表情。

保「どうして喜んでやれないんだ？ 正直、洋子が自分のためだったらあの世界にもどらなかつただろう。でも、歌を聴いてルールのために何かしてあげたいと思ったんじゃないか？」

保、引出しからポストカードを出し、歩に渡す。

歩、ポストカードを見るとフランス語の文字に、外国人のカップルが写っている。

保「前に外国のお客様に新宿御苑を教えたんだった？ おかげでいい時間を過ごせたと書いてあるだろ？ 歩、仕事と言うのはこういうものじゃないのか？ 誰かのために何かをするというのが仕事だろ？」

歩「失礼します」

保「それにバッテリーングだったら、私が教えてやるぞ」

歩、無視して出て行く。
保、ハンカチで目を拭う。

○新幹線

ルルーと洋子が幕の内弁当を食べている。

ルルー、窓の外を見る。

○アパート・歩の部屋・(夜)

歩、携帯電話に表示されたルルーの電話番号を見ている。

通話ボタンに指を掛けようとするが、やめるを繰り返す。

突然、電話が鳴り始め、番号を見るが相手の名前は表示されない。

歩、電話に出る。

歩「はい、もしもし」

女の声「もしもし」

歩「あの」

女の声「歩、元気だった？」

歩、気づき

歩「お姉ちゃん？」

栞「久しぶりだね」

歩「どうして番号を」

栞「お母さんから聞いた。お父さんとは話せなかったけど」

歩「今、どこにいるの？」

栞「夫の都合でカナダにいるの。今度東京に戻ることになったから」

歩「帰ってきなよ。もう父さんも昔みたいな感じじゃないし」

栞「レナのこと可愛がってくれるかな？」

歩「レナ？」

栞「私の娘、歩の姪になるのね」

歩「うん、会いたい」

栞「歩……あの時、引き止めないでくれてありがとう」

歩「……うん」

○バッテリーセンター前・(夜)

歩、フラフラと歩いていると、バッテ
イングセンターからヒットを打つ音が
聞こえる。
歩、走り出す。

○バッテイングセンター

歩、中に入るとルルーがバットを振っ
ている。

空振りが多くなっている。

歩「もつと短く持って、芯に当てる感覚で」

ルルー、振り返り笑う。

× × ×

ベンチで座っている歩とルルー。

ルルー「黙っててごめんね。何かいろんなこ

とがすごい勢いで動いてて」

歩「そうなんだ」

ルルー「どうなるか分かんないけど、でも、

もうこんなチャンス無いだろうし、歌は歌

っていききたいし……私、どうしたらいいか

な？」

歩「……」

ルルー「こんなこと聞いてごめん」

歩「行きなよ。行った方がいい。それにあの
人達なら信じられるし」

ルルー「そう」

○インランドホテル・1021号室

保と洋子が夜景を見ながら話している。

洋子「まだこんな行動力があつたなんて、自
分でも驚いているの」

保「君はこのホテルに収まる器じゃなかった
んだよ」

洋子、保の頬を撫でる。

洋子「泣かないで。いい子で待っていたら、
お仕置きしてあげるから」

保、洋子の手を掴む。

洋子「それに、最近は離れていても色んなこ
とができるわ」

○英会話スクール

翠、外国人講師の授業を真面目にノートにとっている。

○山の中

キャンプをしている荒藤。

たき火の向こうに白いオオカミが立っているのを見つける。

○インランドホテル前・（早朝）

車のトランクを開けるボーイ姿の歩。

歩、荷物を積み込んでいる。

洋子、やって来て歩に荷物を渡す。

歩、トランクに積み込む。

洋子「歩、色々ありがとうね」

歩「はい」

洋子「それと、あの人のこと」

歩、嫌そうな顔をする。

洋子「頼まないわよ」

洋子去り、翠がやって来る。

歩、荷物を受け取ろうとするが、翠、

自ら積み込み、英語で話しはじめる。

翠「歩いてさ、本当は全然優しくないよね」

歩「（日本語で）すみません」

翠「あんた、絶対後悔するから」

葵、去っていく。

ルルーがやって来る。

荷物の上のヌイグルミを持つ歩。

ルルー「その子は私が持つから」

ルルーにヌイグルミを渡し、歩、荷物を積み込み始める。

押し黙っている二人。

歩「……ルルーはすごいね」

ルルー「何で」

歩「色々な人を幸せにしていくな」

ルルー「私は歩に会えて幸せだよ」

ルルーと見つめあう歩。

保「そろそろ行こうか？」

ルルー達、車に乗り込む。

保「昼ごろには帰る」

歩「はい」

保、運転席に乗り込む。

発車する車。

ルルーが後部座席から歩をずっと見て
いる。

○同・エレベータ前

ドアが開くと中学歩が立っている。

歩、エレベーターの中に入っていく。

扉が閉まる。

中学歩の横に立つ歩。

中学歩「ねえ、今どんな気分？」

歩「……」

中学歩「こんなもんなんだよ。皆、君から離
れて行っちゃう」

歩「……」

中学歩「もしかして何か期待してたの？　で
も、最初からわかってただろう」

歩、中学歩を見る。

中学歩「何、その目は？　僕のせいじゃない
だろ？」

歩「……」

中学歩「何か言ってみろよ」

歩「……」

中学歩「『うるさい』とか『黙れ』とかいえば

いいじゃん。僕のことムカつくんだろ？」

歩「僕に会えて幸せだった」

中学歩「はあ？」

歩「『僕に会えて幸せだ』って言うてくれたんだ」

中学歩「何それ？ でも君は置いてきぼりじ

ゃないか？ それでいいの？」

歩「うん」

中学歩、声を震わせて

中学歩「でも、皆行っちゃうんだよ……君を置いて」

歩、中学歩を肩に抱き

歩「僕は君を置いてかないよ」

中学歩、泣き出す。

エレベーターのドアが開くと、中にいるのは歩だけである。

○公園・(夕方)

レナ(6)がベンチに座っている。

レナ「(フランス語で) 歩、早く早く」

ビニール袋を持った歩が駆けてくる。

レナ「早く出して」

歩「今食べるの？」

レナ「うん」

歩「晩御飯食べれなくなっちゃうよ？ 大丈夫

夫？ お姉ちゃんに」

レナ「いいから」

歩「まあいいか、今日は良く勉強頑張ったか

ら」

レナ「でしょ」

歩、袋から肉まんを出す。

レナ「こんなの初めて見た」

レナ、肉まんをみつめて、半分に割り

歩に渡す。

歩、受取り、笑顔で

歩「ありがとう」

(完)